

本土初空襲あす75年

和解はできる

次はアジアと

日米両国の「真の和解」を訴えてきたベテランジャーナリストが、先月、101歳の元米軍爆撃機の操縦士と再会した。真珠湾攻撃の翌年4月、本土は初めて空襲を受けた。国民学校の上空を超低空で飛んだ、あのB25爆撃機のパイロットだった。18日は、初空襲から75年の節目の日。2人は平和な時代を喜び合い、「日米和解の先」について語り合った。【滝野隆浩】

1942年4月18日正午。地上すれすれを飛ぶ方すぎ。小学3年生だった元一キ色の機体は目に焼きつ共同通信ワシントン支局長き、副操縦席の、初めて見の松尾文夫さん(83)は、戸る白人の横顔も、しっかりと山国民学校(現・東京都新宿区立戸山小)の校庭に飛び出した瞬間、ごう音を聞き、松尾さんはその後、空襲を何度も経験した。敗戦1



太平洋戦争博物館でB25爆撃機前に立つリチャード・コールさん(左)と松尾文夫さん。米テキサス州で3月、フォトジャーナリスト・川尻千晶さん撮影

命拾い元記者 機上の101歳元米中尉と再会

カ月前は疎開先の福井市で、B29の夜間無差別焼夷弾攻撃に遭った。逃げ惑った農道の行き止まりで母の手を握り伏せた。大きな落し音の後に水田の泥水が降ってきた。不発弾だった。たまたま欠陥弾で命拾いした。

「アメリカという国を知りたい」。その思いから、長じて通信社記者に。そして半世紀以上、米国をウオッチし続けた。その経験をまとめた著書の冒頭に「初めて見たアメリカ人」のことを書いた。読んだ友人から、副操縦士だった元中尉リチャード・コールさんが存命だと知らされる。2人は2005年、一度会った。爆撃機の操縦士と空襲に震えた元少年。第一声は「あの戦争だけがはしなかったか?」。元中尉とは「フミ

日本本土への初空襲

1942年4月18日、空母から発艦した航続距離の長い米陸軍機B25爆撃機16機が東京、横浜、名古屋、神戸などを爆撃。計87人が亡くなったとされる。指揮官名から「ドリットル隊」と名付けられた。東から列島を横断し主に中国大陸に抜けるルートで実行された「奇襲」作戦だった。

「オ元氣か」と電話がかかってくる仲になった。

日米間には刺さったままの「トゲ」がある。それが松尾さんの持論だった。日本人にはヒロシマ・ナガサキの被爆体験と無差別攻撃の記憶がある。米国人は「パールハーバー」を忘れない。だから「日米両首脳による相互献花を」と記事で訴え、両国政府に働きかけてきた。そして、昨年5月、オバマ大統領(当時)が広島・平和公園で献花。12月、安倍晋三首相が米ハワイの真珠湾で慰霊した。宿願にひと区切りがついた。だから、もう一度、75年の節目の日の前にコールさんに会いたかった。

3月下旬、再びテキサス州サンアントニオの自宅へ。元中尉は101歳になっても、爆撃隊唯一の生き残りとして国じゅうの尊敬を集めていた。B25が展示されている太平洋戦争博物館に一緒に行く。手をそおと握り、歩いた。耳は遠くなっている。日本勤務をへて知日派となった老ヒーローがしきりに繰り返したのは、日本と中国の関係だった。自分は中国に招かれて大歓迎を受けたが、日本は中国人にあまり好かれていないと感じた。だいたいどうぶか、と。同感だった。最大の敵国だったアメリカと和解した今、日本はアジアとの和解に進むべきだと強く思う。国が戦争はしても、努力すれば和解は必ずできる。

別れ際、「シー・ユー・アゲイン」と言われた。松尾さんはその姿を目に焼き付けた。